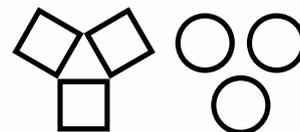


# Press Release

2024年11月12日



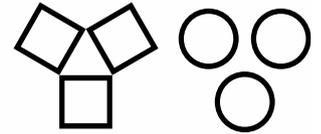
奈良美智《春少女》2012年 アクリル絵具、カンヴァス  
227.0 x 182.0 cm 横浜美術館蔵 ©YoshitomoNara

## 横浜美術館リニューアルオープン記念展 おかえり、ヨコハマ

The Yokohama Museum of Art Reopening Inaugural Exhibition  
"Welcome back, Yokohama"

2025年2月8日(土) - 6月2日(月)

横浜美術館



横浜美術館は11月1日（金）より一部開館しておりますが、来年2月8日（土）より、いよいよ全館オープンを迎えます。これを記念して、「横浜」をキーワードにさまざまな人々を迎え入れたいという想いを込め、「おかえり、ヨコハマ」展を開催します。蔵屋美香の横浜美術館館長就任後初となる館長自らの企画による展覧会です。

本展では新しい船出となるこの機会に、当館コレクションの名作の数々を新たな視点で紹介します。加えて、横浜市歴史博物館、横浜開港資料館、横浜都市発展記念館、横浜市民ギャラリーなど、主に市内の施設が所蔵する、コレクションへのまなざしを豊かにしてくれる作品や資料も展示します。また、本展のためにアーティストに委嘱した新作をグランドギャラリー他で披露します。

作品を読み解くための鍵は「横浜」、そしてリニューアル後の当館の活動理念の柱である「多様性」です。今回は「多様性」という観点のもと、横浜にまつわる作品の中でこれまであまり注目されることのなかった存在—開港以前の横浜に暮らした人びと、女性、子ども、さまざまなルーツを持つ人びとなど—にあらためて光をあてます。これにより、おなじみの作品や横浜の歴史にたくさんの新しい発見をもたらします。こうしてローカルの歴史を深掘りすると、世界の歴史もきっと違って見えてきます。

会場内には、子どもも一緒に楽しめる「子どものギャラリー（仮称）」を設けます。また、当館の活動の柱のひとつである教育普及事業も開催します。

タイトルには、「3年ぶりに横浜美術館が帰ってきた」という意味と、「異なる時代にいろいろな地域からやってきて横浜に暮らした（あるいは現在暮らす）さまざまな人たちを、あらためて『おかえり』と言って迎え入れたい」という希望が込められています。

横浜美術館館長 蔵屋美香

## 本展のみどころ

### 1. 「横浜」の歴史の新たな発見を美術館で

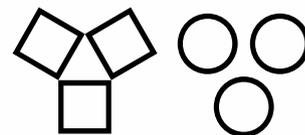
「横浜」をキーワードに「多様性」という観点のもと、絵画、写真、工芸、映像などの作品や資料を通して、新たな視点で意外な横浜の歴史を深掘りします。

### 2. 横浜美術館コレクションの名作の数々が久しぶりに勢ぞろい

セザンヌ、ピカソ、マグリットや奈良美智など、近代美術の名作から現代美術の作品まで楽しむことができます。

### 3. 子どもも一緒に楽しめる

子どものために作品を選び、見やすいよう工夫して展示する「子どものギャラリー（仮称）」を会場内に設け、親子でお話ししながら鑑賞する機会をつくります。



展覧会の構成 本展は以下の全8章にて構成されます

## 第1章 みなとが、ひらく前

「横浜の歴史は開港に始まる。それ以前は小さな漁村に過ぎなかった」。そんな横浜についての決まり文句を再考します。横浜市歴史博物館の協力のもと、縄文期から広義の横浜市域に暮らしてきた人びとが見つかったモノ、遺したモノを、「女性」「子ども」などのテーマに沿ってご紹介します。



《人面付土器》(鶴見区上台遺跡)  
弥生時代後期 H32cm  
横浜市歴史博物館蔵  
(神奈川県指定重要文化財)



ペーター・ベルンハルト・ヴィルヘルム・ハイネ (伝)  
《ペリリ提督横浜上陸の図》1854年以降  
油彩、カンヴァス 53.3 × 80.5 cm  
横浜美術館蔵 (原範行氏・原會津子氏寄贈)

## 第2章 みなとを、ひらけ

欧米諸国の要求に応じ、1859(安政6)年、横浜は開港しました。西洋風の街並みや各国人の姿、鉄道などの風物は、錦絵となって流通し、市外の人びとの好奇心を満たしました。

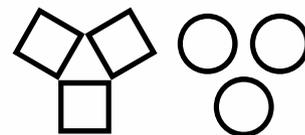
横浜はこうして開港当初から、国内外から向けられる視線を意識しつつ、どのように自分を「見せる」かを考える、「見られる／見せる」都市として出発したのです。

またこの章では、開港直後に始まる横浜の遊廓の歴史をたどります。

外から入ってくる人びとを受け入れるため、まず遊廓や赤線を設ける。この発想は以後も横浜でくり返されることとなります。



昇斎一景《汐留より蒸気車通行の図》  
1872年 多色木版(三枚続) 36.8 × 73.5 cm  
横浜美術館蔵 (齋藤龍氏寄贈)



## 第3章 ひらけた、みなと

横浜では、外国人向けのみやげものとして、あるいは輸出品として、多くの絵画や工芸品がつくられました。

この章では、こうした文化と文化の接触面 [コンタクト・ゾーン] に生まれた品々をご紹介します。

洋画家、五姓田義松は、みやげ品として絵画を制作する父、五姓田芳柳のもとに生まれました。

また日本の学校教育では、女性が美術を学ぶ機会は長く限られていました。その中で、義松の妹、幽香は、学校ではなく家業として絵画を学び、大成しました。



宮川香山《高浮雕牡丹二眠猫覚醒大香炉》  
明治前期 陶磁器 H29.7cm  
田邊哲人コレクション（横浜美術館に寄託）



五姓田芳柳（伝）《外国人女性和装像》  
制作年不詳 絹本着色、軸 99.0 x 38.8 cm  
横浜美術館蔵

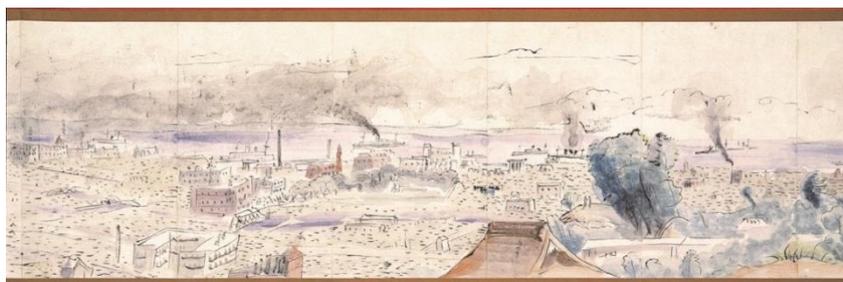
## 第4章 こわれた、みなと

日本画家、今村紫紅の生家は輸出向けの提灯を商っていました。同じく日本画家、牛田雞村（けいそん）の生家は輸出陶磁器の梱包業でした。

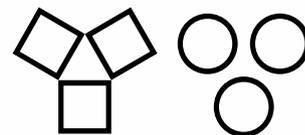
急速に増加した横浜の人口の多くは、このように、輸出入関連の仕事求めて日本各地から集まった人びとで占められていました。

この章では、こうした家庭に生まれた横浜二世のふたりの作品をご紹介します。ふたりを支援したのは、生糸貿易で得た莫大な資産を持つコレクター、原三溪（さんけい）でした。

順調に発展を続ける横浜を、1923（大正12）年、関東大震災が襲います。その時横浜にいたアーティストたちは、何を見、何を描き残したのでしょうか。



中島清之《関東大震災画卷》（部分）1923年 紙本淡彩、卷子 27.8 x 770.5 cm  
横浜美術館蔵（中島清之氏寄贈）



## 第5章 また、こわれたみなと

世界恐慌による打撃を乗り越えて、横浜は徐々に震災からの復興を果たします。瓦礫を埋め立てて1930（昭和5）年に山下公園が完成し、また焼け落ちた幾多の橋梁も架け替えられました。

震災復興から戦時下まで、繁栄を謳歌しながら、少しずつ時代の波にのまれてゆく横浜の姿を、アーティストたちが描いた川や橋の風景に探ります。

洋画家、松本竣介を代表するシリーズ、横浜駅近くの月見橋を描く一連の〈Y市の橋〉は、横浜初のまとまったご紹介です。



片岡球子《緑蔭》  
1939年 紙本着色 194.0×286.0cm  
横浜美術館蔵（片岡球子氏寄贈）



松本竣介《Y市の橋》  
1943年 油彩、カンヴァス 61.0×73.0cm  
東京国立近代美術館蔵

## 第6章 あぶない、みなと

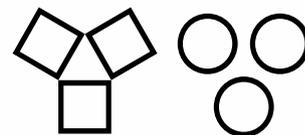
1945（昭和20）年5月の横浜大空襲で被害を被った横浜は、戦後、中心部の占領軍接收によって長く復興をはばまれました。ここでは占領下から高度経済成長期までの横浜のようすをご紹介します。

1859（安政6）年の開港時にいち早く港崎（みよざき）遊廓が開かれた横浜では、敗戦の際にもさっそく米軍兵のための慰安施設が準備されました。その役割は、真金町（永真）遊郭、本牧のチャブ屋街、街娼などにも引き継がれ、1958（昭和33）年の売春防止法完全施行まで続きました。

こうして戦後の混沌を引きずった横浜は、昭和期、多くの日本映画に登場しました。「港」「外国人組織」「麻薬取引」といったお決まりの要素は、今日も横浜を舞台とする映画や小説に見られます。



常盤とよ子《路上》1954年（1988年のプリント）  
ゼラチン・シルバー・プリント 49.8×35.8cm  
横浜美術館蔵



## 第7章 美術館が、ひらく

1983(昭和58)年、みなとみらい21地区の開発が始まりました。1989(平成元)年には「横浜博覧会(YES'89)」にあわせ、丹下健三設計の横浜美術館が開館します。この章ではまず、横浜美術館の設立過程をご紹介します。

あわせて、開館前後に収蔵され、「横浜市民」となって30年以上親しまれてきたコレクションの名品を新しい視点から読み直します。特に、ポール・セザンヌ作《縞模様の服を着たセザンヌ夫人の肖像》(1883-85年)のオルタンズ・フィケ＝セザンヌ、ピカソ作《ひじかけ椅子で眠る女》(1927年)のマリー＝テレーズ・ワルターなど、描かれたモデルの声に耳をすませます。



ポール・セザンヌ  
《縞模様の服を着たセザンヌ夫人》  
1883-85年 油彩、カンヴァス  
56.8 × 47.0 cm 横浜美術館蔵



ルネ・マグリット《王様の美術館》  
1966年 油彩、カンヴァス  
130.0 x 89.0 cm 横浜美術館蔵

## 第8章 いよいよ、みなとが、ひらく

最終章として、横浜美術館の新しい船出を祝し、2010年代以降の作品と、アーティストの檜皮一彦に制作を委嘱した新作をご紹介します。また、この章では子どものために作品を選び、見やすいよう工夫して展示する「子どものギャラリー(仮称)」を設けます。

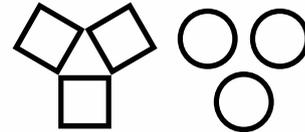
多様性を切り口に、横浜に生きるさまざまな生を祝福し、子どもたちに未来への希望を託します。



檜皮一彦《walkingpractice feat.HIWADROME》2023年  
サイズ可変 車いす、カーブミラー、LED照明、プロジェクター、LCD、  
メディアプレイヤー、3Dプリンター、マネキン、インシュロック  
発表場所：東京都美術館(参考写真)



奈良美智《春少女》2012年  
アクリル絵具、カンヴァス 227.0 x 182.0 cm  
横浜美術館蔵  
©YoshitomoNara



## 開催概要

### 横浜美術館リニューアルオープン記念展 おかえり、ヨコハマ

The Yokohama Museum of Art Reopening Inaugural Exhibition  
"Welcome back, Yokohama"

会 期：2025年2月8日（土）－6月2日（月）

開館時間：10：00～18：00（入館は17：30まで）

休 館 日：木曜日（ただし3月20日（木・祝）は開館）、3月21日（金）

主 催：横浜美術館、神奈川新聞社、t v k

協 力：みなとみらい線

特別協力：横浜市歴史博物館、神奈川県立歴史博物館

観覧料：一般 1,800（1,700）円、大学生 1,500（1,400）円、高校・中学生 900（800）円、小学生以下無料

※（ ）内は有料20名以上の団体料金（要事前予約、美術館券売所でのみ販売）

※障がい者手帳をお持ちの方と介護の方（1名）は無料

同時開催する横浜美術館コレクション展も、「おかえり、ヨコハマ」展チケットで観覧当日に限りご入場いただけます。

関連イベント：詳細は決まり次第ウェブサイトにてご案内します。

## 次回以降の企画展ラインナップ

横浜美術館リニューアルオープン記念 佐藤雅彦展（仮称）

2025年6月28日（土）－11月3日（月・祝）

横浜美術館リニューアルオープン記念 日韓現代美術展（仮称）

2025年12月6日（土）－2026年3月22日（日）

横浜美術館

〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-4-1

TEL: 045-221-0300 FAX: 045-221-0317 <https://yokohama.art.museum>

プレス画像申込

プレスリリース  
お問合せ先

横浜美術館 広報担当（福山、高橋）

〒220-0012 神奈川県横浜市西区みなとみらい 3-4-1

TEL：045-221-0319 FAX：045-221-0317 Email：[pr-yma@yaf.or.jp](mailto:pr-yma@yaf.or.jp)